

第2回 研究部例会（例会報告）

「3年生のフラフト実践報告～パスしてみたフラッグフットボール～」(中村俊介)

「4年生の跳び箱実践報告～表現を楽しむことをめざして取り組んだ

一瞬を一瞬で終わらせない跳び箱運動～」(窪田浩尚)

編集部 田中宏樹（兵庫教育大大学院）

6/13(土)14~17時に、大阪保育運動センター及びzoomのオンライン会議にて、今年度第2回目の支部研究部例会が開催された。初めてのオンラインでの例会ということもあり、音声や映像の不具合等もあったが、約20名の参加者で無事に会を終えることができた。

1. 中村実践「3年生フラッグフットボール」

【学ばせたいこと】

- ・作戦を使って相手をだまして、タッチダウンができる。(単純な作戦)
- ・全員、パスが投げられる。
- ・ハンドオフの体の使い方(ボールを隠す)

【学習計画】

時数	内容
1~3	インベーダーゲーム(5対5)
4	オリエンテーション
5	体育館でパス練習
6~7	3対2のパスゲーム
8~10	ハンドオフも導入したゲーム
11~14	ランやガードも導入したゲーム

フラフト実践は「ブロック」や「ハンドオフ(ボールの手渡し動作)」技能を中心とし、「ランプレー」が主体のゲーム展開となるものが多い。そんな中でも、中村先生は「パスプレー」を中心としており、挑戦的な実践からいつも学ぶことが多い。

討議会で話題に挙がった内容は「パスの学

習の妥当性」と「ハンドオフの理解について」と「最終的なゲーム様相がランプレー主体であったこと」である。「3年生という発達段階で、楯球を用いたパスの学習は難しいのではないか」、「パスプレーは成功率が低く、全員の成功体験を経ずに学習が終わってしまうのではないか」、「子ども達はハンドオフの意図を理解し、時空間を工夫した技能を獲得できていないのではないか」といった意見が出た。

私の考察を述べる。フラフトは「技能が他球技よりも易しい」と言われている教材であるが、それはランプレーの場合のみに当てはまる。パスプレーを主体とした実践を行ったこともあるが、子ども達の技能差を縮めることは難しいと感じ、全員の成功体験を保証できなかった。そこで、近年は「ハンドオフ」を中心技能に据え、ランプレーを主体とした実践を行っている。ハンドオフで大切なことは、「演技力」と「タイミング」である。そして、子どもがそのスキルの醍醐味に面白さを感じ、全員で意図して動きを演出できているかが重要である。また、今回中村先生はダウン制(スタート位置が前進していくルール)を採用されていなかったが、ダウン制でないゲームでは、子ども達はタッチダウンすることのみを考えることになる。そうすると、プレーが大味になり、ディフェンスも後方で守るようになる。すると、ハンドオフの際に攻守のプレーヤー間に距離が生じ、守備にボールの在り処を見られてしまうことが、ハンドオフの有効性を感じられない要因の一つになっていると思った。

2. 窪田実践「4年生集団での跳び箱運動」

【学ばせたいこと】

- ・跳び箱を使って色々な方法で飛び越えることができる。
- ・跳び箱を飛び越える時のルールやポイントが分かる。
- ・グループで音楽跳び箱、マット表現づくりを通して表現の楽しさに気付く。

【学習計画】

時数	内容
1	オリエンテーション
2~6	色々な跳び方を考える
7	リズムに合わせて、連続で跳び箱を飛び越える
8	跳び箱とマットを繋ぎ、跳び方を考える
9~11	音楽跳び箱・マット表現

窪田先生と言えば、健康教育実践のイメージが強いが、以前から同志会の跳び箱実践に興味があり、今回は満を持しての実践発表となった。窪田先生はご自身で「学ばせたかったことに曖昧さがあり、特に単元終盤につまずきを感じている」と話されていたが、子ども達が活動している動画を見る限り、とても面白い場づくりがされており、子ども達が生き生きとした楽しそうな授業であったと感じた。

討議会で話題に挙がった内容は「**跳び箱の教材観**」についてである。参加者の牧野先生は「跳び箱という教材をどう捉えるのか？というよりも跳び箱ではなく、集団表現を目的とする違った名前の教材ではないか？」と意見されており、跳び箱教材を唱えるのであれば、「**空間表現**」や「**姿勢制御**」を含んだ「**助走-着手-着地**」における「**技術学習**」が必要であり、今回の実践はそこが余り見られなかったことに言及されていた。

「**集団表現**」は、従来の跳び箱にはない、音楽や友達とのシンクロの面白さがあり、リズム良く跳ぶことの心地よさが味わえ、作品づくりを目的に取り組むことができる。この内容は、学習指導要領の「表現運動」や「体づくり運動」の目的と親和性が高く、単元目標の価値づけの仕方によって、今回の窪田先生の実践の目的が明確にできるのではないかと感じた。

今回の窪田先生の実践は「**シンクロマット**」に近いと表現できる。集団表現の実践例は少なく、そのため、完成形やゴールのイメージは持ちづらい。そんな中でも窪田先生は試行錯誤され、新たなことにチャレンジされていた。その挑戦から学べることが大いにあった。



※2020.6.13 大阪保育運動センター
& オンライン開催